



TITLE:

京都大学構内の遺跡：創立百周年記念展示

AUTHOR(S):

京都大学埋蔵文化財研究センター

CITATION:

京都大学埋蔵文化財研究センター. 京都大学構内の遺跡：創立百周年記念展示. 1997

ISSUE DATE:

1997-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151834>

RIGHT:

京 都 大 学 構 内 の 遺 跡

平成9年11月

京都大学埋蔵文化財研究センター

京都大学の構内には、縄文時代から江戸時代にわたる各時代の遺跡が存在しており、昭和47年以来、文学部考古学研究室、埋蔵文化財調査室などの調査を経て、昭和52年には埋蔵文化財研究センターが設置された。現在は当センターが、発掘調査の指導と実施、出土遺物の研究と保存、成果の公刊といった一連の活動にあたっている。

この間、吉田キャンパスを中心に、和歌山県白浜町理学部附属瀬戸臨海実験所、京都府丹波町農学部附属牧場などの構内で遺跡調査がおこなわれ、発見された墳墓や住居跡などのさまざまな遺構や、石器、土器、陶磁器、木製品をはじめとする大量の遺物は、過去の人々の日常生活や生産活動を復元するための貴重な資料である。

また、出土資料に対しては、考古学の方

法によって研究をすすめるとともに、文献史学や地理学などの人文科学や、建築学、物理学、化学、地質学、動植物学など自然科学の諸分野の研究者の協力も得て、歴史的景観や地形環境の復元、遺物の材質分析をおこなっているほか、新しい調査や分析手法の開発に取り組んできた。

調査成果は、平成元年以来、本部構内の尊攘堂^{そんじやうどう}を資料室として公開してきたものであるが、このたび京都大学の創立百周年を記念して、最近の成果もとりにいれて整備をおこない、あらためて学内学外の方々に参観していただくことにした。現在、多くのさまざまな人々が学び働くキャンパスの地下に眠る過去の世界について、しばし思いを馳せる時間をもっていただければ幸いである。

資料室（尊攘堂）

尊攘堂の名は、子爵品川弥二郎が吉田松陰の遺志をくんで明治20年に高倉通錦小路に創設し、維新における尊攘の功ある人々を記念したものに由来する。現在の建物は、品川の死後本学に寄贈された松陰の遺墨類をおさめるため、明治36年に建てられた。外装を化粧した煉瓦造平屋建・寄せ棟屋根の擬洋風建築とよばれる建物で、破風付きの窓、小屋根、切妻のポーチなどの洋風要素を配している。また内部は、扁平なアーチをもつ一段高い小室が奥に控える左右対称平面で、中央広間の天井をめぐる漆喰装飾と照明の唐草装飾とがあいまって、華やかな印象を醸し出している。



縄文・弥生時代の遺跡

吉田キャンパスの北部構内には、本学考古学講座の創始者である濱田耕作博士が大正12年に発見した北白川追分町遺跡が所在する。これまでの調査で、縄文時代中期の竪穴住居跡、後期の甕棺・配石墓、晩期の土壌墓をはじめ、谷状の低湿地からは埋没林やトチの実の貯蔵穴、ヒトや動物の足跡などが発見され、西日本屈指の縄文遺跡となっている。

今から約3500年前になる縄文時代後期の甕棺は、いずれも日常の生活に用いた深鉢を転用して棺としたもので、底部を打ち欠いて使用している。配石墓は、河原石を数十個、円形や楕円形に密集させたもので、甕棺を伴うものもあった。西日本の縄文時

代墓制に関する重要な資料として、植物園内に移築して復元保存されている。

谷状の低湿地にあたる地点では、縄文時代晩期の土器や石器類に加えて、木材や種実類が水漬かりの状態で良く残り、外果皮を除いたトチの実を貯蔵のためにまとめた穴もみついている。これらは、自然の恵みに依存する当時の生業や食のあり方を検討するうえで貴重な資料となっているほか、自然科学的な分析との総合によって生活環境の復元がされており、縄文時代の学際的研究に格好の場を提供している。

弥生時代の遺跡については、総合人間学部構内で、今から約2200年前の前期の水田や流路が見つかっており、本部構内や北部構内でもこの時期の資料が多く出土しているほか、北部構内では中期の方形周溝墓が



縄文時代晩期の低湿地に残る埋没林。中央の土手は土層観察用の畦（北部構内）

見つかっている。前期の水田は、やがて生じた土石流により瞬時に埋没したものとみられ、地形の微妙な起伏にあわせて細かく工夫された畦の区画や、耕作にともなう地表面の凹凸などが、砂に覆われて非常に良く残っていた。稲作が採用されたころの技術的水準を鮮やかに伝える好例である。

また、和歌山県白浜町の理学部附属瀬戸臨海実験所構内の瀬戸遺跡は、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器や人骨が出土し、南紀における弥生時代の始まりを考えるうえで重要な遺跡である。このほか、京都府丹波町^みの農学部附属牧場構内に所在する美月^{つき}遺跡でも中期～後期の水路や土坑がみつかり、大阪府高槻市の農学部附属高槻農場も、弥生時代の拠点集落として学史上著名な安満^{あま}遺跡の上に位置している。



縄文時代後期の配石墓（北部構内）



弥生時代前期の水田跡（総合人間学部構内）



奈良時代の石敷製塩炉（瀬戸臨海実験所構内）



平安時代の梵鐘鑄造坑（総合人間学部構内）



室町時代の井戸と土器溜（医学部構内）

古代・中世の遺跡

構内に古墳時代の遺跡は少ないけれども、総合人間学部構内では、群集する方墳が発見されている。奈良時代になると、本部構内で竪穴住居跡が見つまっているほか、和歌山県白浜町の瀬戸臨海実験所構内では、濃縮した海水から塩を得るための石敷炉や専用の土器類が出土しており、南紀を代表する製塩遺跡となっている。

総合人間学部・医学部の各構内では、古代や中世の鑄造関連の遺跡が散在し、平安時代中期の梵鐘を鑄造した土坑とともに、鑄型や炉の残片が発見されている。当時の鑄造技術を復元するための貴重な資料であり、文献にはあらわれない鑄物工人集団の活動が推定できる。また北部構内でも、緑釉陶器、灰釉陶器など、古代の優品が数多く出土しており、この時期にかなり重要度の高い空間であったことがうかがわれる。

吉田山一帯は、古来神楽岡の葬地として著名であり、構内でも中世の墓地が点々とみつかっている。とくに北部構内で発見した火葬塚は、方形の段を形成した特異なもので、皇族クラスの人物の葬儀にかかわる貴重な事例として、埋め戻して保存したうえで、現地に復元築造している。

また、病院構内南辺は白川北殿北辺の、総合人間学部～医学部一帯は藤原北家勸修寺流の人々の邸宅に比定され、井戸、溝、土坑などから大量の土師器や瓦器、国産や輸入の陶磁器類が出土している。これらは、編年的研究のほか、生活や流通の実態をさぐるうえでも重要な資料である。

古墳に副葬された須恵器・土師器

(総合人間学部構内出土・左端の甕器高17cm)

総合人間学部構内で群集して見つかった方形墳には、これらの須恵器や土師器が副葬されていた。吉田キャンパス一帯では出土することの少ない古墳時代の遺物である。5世紀末～6世紀初頭の年代に位置づけられる資料群で、杯の蓋と身、高杯、甕の各種類が揃っており、当時用いられていたうつわの内容が良くわかる。



黄釉陶器鉄絵の盤

(本部構内出土・口径34cm)

鎌倉時代に掘られた廃棄土坑から、他の種類の大量の土器類とともに出土した。下地に黄褐色の釉を厚くかけ、口縁部と内面に鉄絵と呼ばれる茶褐色の精巧な装飾が施される。中国福建省泉州の晋江县磁窰窯の生産品とみられ、長寿を祝う吉祥句「福海壽山」の文字が描かれている。日本に将来された資料としては類例の少ない逸品で、中世における対外交渉の一端を示している。



漆器の椀

(医学部構内出土・左右18cm)

鎌倉時代の井戸の底に、土圧でつぶれながらも7割ほどが良く残っていた。写真はそれを底部側よりみたものである。黒色漆の地の上に内外面とも赤色漆で竹笹の文様が端正に描かれており、当時の工芸技術の水準をうかがわせる優品である。出土した地点は、藤原北家勸修寺流の人々にかかわる邸宅の一角と推定される範囲内にあり、こうした階層の人々の嗜好がしのばれる。



近世の遺跡

近世の本部構内から病院構内にかけては、聖護院村や吉田村に属する田畑がひろがっており、そこに鴨川のほとりの荒神口から北東に向かって京都と近江坂本を結ぶ、白川道と呼ばれる街道が通じていた。この道は、幕末期以降、本部構内にあたる部分を断ち切られてしまったが、現在も「山中越」と呼ばれる道筋に名残をとどめている。本部構内の発掘調査では、この白川道や、その前身の中世にさかのぼる道路遺構も見つかっている。幅約4.5mの路面は、土や石を堅くたたきしめて造成し、車輛の通行にともなう轍おだちの跡が明瞭に残っていた。また、これに沿う側溝、野壺、井戸なども発見され、この時期の都市近郊農業のありようや景観を復元する資料となっている。

聖護院村の北辺にあたる病院構内南辺には、幕末の歌人太田垣蓮月おおた がきれんげつ（1791～1875）



轍の残る近世白川道の遺構（本部構内）

が文久年間に居住したことが知られ、自詠の歌を手づくねの茶器類に釘彫りした「蓮月焼」が多数出土している。この蓮月焼は、当時の文人墨客の間に流行していた煎茶趣味に受け入れられて大いに評判となった逸品である。

また幕末の動乱期には、本部構内に尾張藩邸が、北部構内に土佐藩邸が設置されたことが古絵図に記されており、関連する堀や井戸などの遺構が発見されている。とくに、北部構内でみつかった土佐藩邸の南限を画する幅約3mの堀からは、大量の棧瓦が出土した。商標である刻印から土佐で生産されたことがわかり、当時の流通経済を考えるうえで興味深い事例を提供している。

このほか構内では、旧制高校や帝国大学関係の資料もしばしば出土する。文字記録としては残されていない例もあり、考古学的手法によるこうした時代の研究も、今後重要さを増してくるであろう。



土佐藩邸の南限を画する堀（北部構内）

遺跡の調査と保存修景

京都大学構内遺跡の発掘は、基本的にその大半が、校舎の新営等の工事に先だって実施されるものであるが、調査の結果、とりわけ歴史的資料としての重要度が高く、またキャンパス一帯の過去を象徴すると判断される遺跡については、現地あるいは移築によって保存や復元の処置をとってきた。

北部構内では、縄文時代の配石・甕棺墓群を植物園内に移築復元しているほか、鎌倉時代の火葬塚を庭園に取り込んで現地に復元整備しており、これらはいずれも当時の歴史的景観を彷彿とさせる貴重な空間を形成している。また総合人間学部構内においては、平安時代の梵鐘鑄造遺構を埋め戻して保存したうえ、模型と解説板を設置して整備を進めているほか、瀬戸臨海実験所構内でも、南紀における生業を象徴する資料である奈良時代の石敷製塩炉を移築復元

し、水族館とあわせ観覧に供している。

遺跡は、地中に埋もれて残されている過去の人々の活動の痕跡であり、一度破壊されてしまうと、二度と情報を得る機会は失われてしまう。しかしながら、遺跡をすべて保存していくことは現実として不可能であり、むしろ、現代における開発と調和をはかり、わたしたちの未来に歴史的な遺産を活用していく方法を追究することが、最も重要な課題といえる。

百年を越える学問と研究の空間が形成されてきた本学のキャンパスは、埋蔵文化財のほかに歴史的建造物も多く残されており、それらと調和のとれた共存をはかりながら新たな歴史を刻む方法を模索し実践するうえで、またとない場である。計画的な発掘調査と、調査成果にもとづいた保存修景は、そのためにもきわめて重要な役割を果たすものである。今後とも、学内各部局の方々の御協力をお願い申し上げる次第である。



発掘中の遺跡（総合人間学部構内）



復元整備後の鎌倉時代の火葬塚（北部構内）

